

## 家庭内の家事分担と家族の属性の関連

鶴川女子短期大学	大野祥子
白百合女子大学	菅野幸恵
白百合女子大学	柏木恵子

### The Division of Household Affairs and Demographic Factors of the Family

Tsurukawa women's Jr. college	OHNO, Sachiko
Shirayuri college	SUGANO, Yukie
Shirayuri college	KASHIWAGI, Keiko

大学生とその両親を対象として家庭内の家事分担についての質問紙調査を行った。分析対象となったのは父母子の回答が揃い、3者が同居している76組であった。家庭を維持するために必要な機能12項目について「父/母/対象となった大学生の子ども/その他の親族/購入・外注」それぞれの分担率を、全体を10として5分割するよう求めた。全体的傾向としては家事分担は大きく母に偏っており、購入・外注は少ないことが示された。家事分担パターンの4類型による比較では、母親以外の人物の分担率が比較的高い「親族応援型」と「夫婦協同型」の2類型では母が仕事を持つケースが多いこと、「母中心型」と「母単独型」の母は無職かM字型就労が多いこと、父の家事参加と父の仕事内容や労働時間は関連がないことが示された。「夫婦協同型」の最大の特徴は、生活費の稼得で妻の分担率が夫の分担率を上回っていることであった。この結果から、女性の経済力が男性の家事参加を促すことが示唆された。

#### 【キー・ワード】家事分担パターン、母親の就労、女性の経済力

The purpose of this study is to explore the relation between the division of household affairs and demographic factors of a family. Subjects were 76 college students and their parents who lived with them.

The main results were as follows:

- 1) Mothers were in charge of most kinds of household management (housework, family financial management, expressive function), except earning the cost of living.
- 2) The extent of relying on housework services outside of family members was very low.
- 3) Four types of housework dividing patterns were identified. Among “kin-supported” type and “equally sharing couple” type, the rate of working mothers was high. On the other hand, many mothers were housewives or part-timers among “mostly mother charging” type and “only mother

charging” type. There was no significant difference on fathers’ working time between types.

4) Among “equally sharing couple” type, fathers and mothers earned the cost of living equally.

From these findings, women’s economic power was found to enhance men’s commitment to housework.

**【Key Words】**Dividing Patterns of household affairs, Working mothers, Women’s economic power

## 問 題

「父はサラリーマン，母は専業主婦で子どもは2人」という近代家族像は，高度成長期からオイルショックにかけての急速な社会変動を経て1970年代に成立した（落合，1997など）。当時の性別分業的な家族においては，「夫は外で働き，妻は家庭を守る」ことは当然と受け止められていた。1972年の世論調査では，この考え方に賛成する人は男女とも8割を超えていた（総理府広報室，1972）。

その後，この考えに同感する人は世論調査の回を重ねるごとに減っていき，2000年には男性の29.6%，女性の21.4%となっている（内閣府，2001）。この調査の結果を詳細に見ると，男性より女性，しかも若い世代ほど性別分業に賛成する人が減っていることがわかる（例えば20代女性は13.5%，20代男性は18.7%）。

夫婦の性別分業を肯定する人が減った背景には，女性の就労が増加して「妻は専業主婦」という規範が実態にそぐわなくなったことが挙げられるだろう。しかしだからといって夫と妻が仕事も家事も平等に分担するようになった訳ではない。妻が家庭外で就労しても夫の家事分担は増加しないこと（例えば，伊藤ら，1984；総務省，1996など），既婚女性の家事の行為者率は職の有無にかかわらず極めて高いこと（NHK放送文化研究所，2002）が，各種の調査によって示されている。その結果，「夫は仕事，妻は家事と仕事」という「新・性別役割分業」といわれる分業形態が生じている（岡村，1997）。

このような事態は，妻の側に家事分担に関する不公平感をもたらす。諸井（1996）は，既婚女性を対象とした調査で，14項目の家庭内労働すべてにおいて負担が妻の側に偏っており，妻が過小利得感を抱いていること，家事や子育ての点で夫に対して過大利得状態にある妻は夫婦関係満足が高くなることを示している。また岩間（1997）は，重回帰分析を用いて，夫の家事参加が妻の家事分担不公平感を有意に減じることを明らかにした。

家事分担に関する研究・調査の多くは，夫婦の間で家事がどのように分担されているかを扱っている。しかし，現実の家庭生活においては家事分担は夫婦二人の間だけでなく，子どもや同居の親など他の家族メンバーの参与も考えられる。この頃では結婚したカップルが新居を妻の実家の近くに構えることが多いといわれるが，妻の親なら同居でなくても，家事や育児に関して気兼ねせずに応援を頼めるといふ意図があるのだろう。家事の種類によっては，既製品を購入したり家事代行サービスを利用したりすることもできる。

内閣府（2000）は，「炊事，洗濯，掃除などの家事」を分担する人を，夫・妻・子ども・家族全体・その他の人から1つを選択する形で調査を行っている。結果は妻を選択した者が86.6%であり，ほと

んどの家庭で家事は妻が引き受けている状況があらわれている。しかし妻が主たる家事の担い手であったとしても、妻以外の家族メンバーの参与の程度は家庭によって異なるものと考えられる。

本研究は、家庭内の家事分担の様相を、夫婦だけでなく子どもや別居の親族、購入・外注といった手段まで含めた上で、より多角的に捉え、それが家族のライフスタイルとどのように関連するかを検討することを目的とする。柏木(1999)のモデルによると、女性の労働市場参入等の社会変動は、個人の生活や心理に影響を与え、やがて個人や家族の男女役割が曖昧・重複化したり(男女役割のボーダーレス化)、性別の心理的特性が縮小・消滅する(アンドロジニー化)と予測されている。家事分担のパターンを切り口として、家族内での男女役割のボーダーレス化が、家族の社会的属性のどのような側面と関連するのか探ることによって、柏木のモデルの検証を試みる。

なお、本研究では「家事」を衣食住に関する一般的な項目だけに限定せず、「家庭を運営・維持するために必要な機能」と定義する。従って、普通は家事とされない「生活費を稼ぐ」を調査項目に含めた。また目黒(1987)が「サービス産業は多様な形で家事領域に入り、コストと情緒性を無視すれば、主婦は不必要ですらある。...しかし、家族生活にふくまれる家事以外の領域について回答がでないことはいうまでもない。」と指摘したように、家族生活は家族の精神的健康やパーソナリティの安定を図る情緒的な機能も担ってきた。従って、一般的な「家事」と違って具体的に目に見える「労働」の形をとらないが、情緒の領域にまつわる項目も採用された。

## 方 法

### (1) 調査対象者と調査の方法

都内および地方都市(名古屋,水戸,那覇)の4年制大学計4校の学生。都内と名古屋の2大学では学生の両親も対象とした。

学生の調査は、大学の講義時間中に調査用紙を配布し、その場で回答してもらい、回収した。回答に時間のかかる場合は調査用紙を持ち帰り、後日回収箱に入れることも可とした。

両親に対する調査も行なった2大学では、学生調査時に併せて2枚の封筒を配った。宛先欄に父親・母親それぞれの住所氏名をその場で記入してもらい、回収した。この封筒を使って、父親、母親それぞれに返信用封筒を添付した調査用紙を郵送した。親子・夫婦のマッチングをするため、表紙にはあらかじめ父親票・母親票・大学生票共通のナンバリングがされた。

大学生データの回収数(回収率)は4大学あわせて782通(73.5%)。父親データは2大学あわせて125通(24.8%)、母親データは2大学あわせて143通(28.4%)が回収された。

本稿では、そのうち大学生の年齢が18歳から22歳であって、大学生・父親・母親3者の回答が揃っており、かつ3者が同居している76組分のデータを分析対象とする。

### (2) 調査用紙

「生活意識に関する調査」と題して、以下のような調査内容を含むものであった。

家族構成、 自分専用のスペースの有無、 家族/家族以外の人と一緒にいる時間、一人で過ごす

時間(平日/休日), 家族の共行動の頻度(3項目), 家庭内の家事分担(12項目), 家族に関する価値観(12項目), 家族に対する評価・感情(15項目), 家庭, 社会, 個人に対するエネルギー配分(2項目), 個人化に関する尺度(20項目), 両親の夫婦関係についての認知(大学生のみ, 11項目), 結婚の満足度(父親・母親のみ, Nakagawa[Kazui], Teti, & Lamb(1992)が作成した Marital-Dyadic Adjustment Scale(MDAS)を一部変更した21項目), 生活の諸側面に対する満足度等, フェイスシート。

このうち 家族構成と 生活の諸側面に対する満足度等, フェイスシートは, 大学生用・父親用・母親用で調査項目が若干異なるが, いずれの調査票も7ページから成る。なお, この調査は平成12年度-平成14年度文部省科学研究費補助金によるプロジェクト, 「社会変動・家族・個人の発達に関する発達・文化心理学的研究(研究代表者 柏木恵子)」の一部として行われた。<sup>1)</sup>

本稿ではそのうち, 「家庭内の家事分担」を中心に分析を行なう。ここでは12種類の家事項目について, 「父親」, 「母親」, 「調査対象となった大学生の子ども」, 「その他の子どもや親族(別居も含む)」, 「購入・外注」それぞれの分担割合を全体を10として5分割してもらった形式をとった。家事の内容によっては5分割が妥当でないものもあるが(例えば, 「生活費を稼ぐ」に「購入・外注」は考えにくい), その場合には当該の欄に「0」を記入してもらったこととして, 回答の形式を統一した。

## 結果と考察

### (1) 分析対象者の属性

分析対象となった76人の大学生の内訳は, 男子2名, 女子74名であった。平均年齢は18.6歳(SD=.91)であった。父親の年齢は43歳から61歳(平均50.8歳, SD=3.44), 母親の年齢は42歳から58歳(平均48.0歳, SD=3.62)。両親の平均結婚年数は平均23.1年(SD=3.05)である。父親の職業は, 民間企業勤務が52.6%, 公務員・教員が25.0%, 家業・自営が13.9%で, 専門職, 自由業は少ない。週あたりの平均労働時間は52.5時間であった。

母親の職業は, 民間企業勤務が3.9%, 公務員・教員が7.9%, 家業・自営が6.6%である。勤務形態の不明瞭な自営・家業等を除いたフルタイム勤務者(週あたり35時間以上のパートを含む)は76人中13人(17.1%), パートタイマーは20人(26.3%), 無職が26人(34.2%)であった。

夫婦間の職業の組み合わせで最も多かったのは夫が民間企業勤務で妻が無職のペア(15組, 19.7%), 次いで夫が民間企業勤務で妻がパートのペア(13組, 17.1%)であった。夫婦とも民間企業か公務員・教員という勤め人同士のペアは11組(14.5%)であった。

最終学歴は, 父親は大卒が52.6%, 高校・高専卒が31.6%, 母親は大卒が23.7%, 短大・専門学校卒が50%, 高校・高専卒が25.0%である。夫婦間の学歴組み合わせで見ると, 父が大卒で母が短大・専門学校卒が最多(22組, 28.9%), 次いで両親とも大卒が15組(19.7%), 両親とも高卒が12組(15.8%)であった。

家族形態を見ると, 核家族が50組(65.8%), 祖父母が一人でも同居している三世代家族が24組(31.6%)であった。子どものきょうだい数は, 一人っ子が10人(13.2%), 2人が37組(48.7%),

3人が26組(34.2%),平均2.3人であった。

## (2) 家事分担の全体的傾向

12種類の家事項目についての分担割合の平均(SD)を表1に示した。

まず目につくのは、一般に「家事」と表現されるような衣食住に関する仕事は、圧倒的に母親によって分担されていることである。家事の種類と回答者にもよるが、母親以外の人物の分担率は1割に満たないものが多い。従来の家事従事者に関する研究では、主に夫婦の間での妻への負担の偏りが指摘されてきたが、他の家族と周辺のメンバーまで含めても全体的な傾向はあまり変わらないことが明らかになった。ただし、同居の祖父母がいる場合や、子どもの性別構成等によっては、分担の様相が異なるケースもあると考えられる。家族構成による比較は後述する。

反対に「生活費を稼ぐ」については、父親の分担割合が8割を超えている。このことから今回のサンプルの全体的な傾向としては、性別分業的な役割分担がなされているといえよう。

「購入・外注」という回答は、出来合いの惣菜の購入や出前、食材宅配サービス、衣類のクリーニング、ハウスクリーニング、使い捨ての用具の利用、ファイナンシャルプランナーの活用等を想定して設けたものである。女性のパート就労が増えた背景には、家事サービス業が家庭に入り込み主婦に余剰時間ができたことがあるとされるが(目黒,1987)、実際には家事サービス業による分担率は「食事のしたく」以外はほとんど0であった。つまり「家事サービス業を利用するおかげで家族メンバーの負担が減った」とは感じられていないということである。内閣府(2001)によると、家事に関して「外部のサービスを利用したい」と答える人は16.2%(女性17.8%,男性14.2%)に対して、「家族の手で行いたい」と考える人が81.7%(女性80.6%,男性83.0%)おり、家事サービス業の利用にはまだ抵抗感があることがわかる。

## (3) 父・母・大学生の回答の一致度

回答者(父/母/大学生)を被験者間要因、分担者(父/母/対象となった大学生の子ども/その他の親族/購入・外注)を被験者内要因とした2要因の分散分析を行うと、「トイレの掃除」「生活費を稼ぐ」「家計のやりくり」と「資産管理」以外の項目で、回答者と分担者の交互作用が有意であった。家庭の経済にかかわる3項目はいずれも交互作用がみられなかった。つまり、回答者によって「誰が分担しているか」の認識に大きな差が見られなかったということで、それだけ一致度が高いといえることができるだろう<sup>2)</sup>。

有意な交互作用がみられた項目については、分担者ごとに父母子の回答を比較する多重比較(Scheffe法)を行った。結果は表1にあわせて示した。項目によって多少の傾向の違いはあるが、父と母の回答に有意差はほとんどない。父の分担率については母親より父親自身の方が若干高く見積もっている項目が多いが、有意といえるほどの差ではない。一方、大学生は自分を含め、両親以外の人物の分担率を有意に高く、母親の分担率を有意に低く答えることが多い。換言すれば、父親と母親は家族生活を営むにあたって必要な機能は自分達二人がほとんど果たしていると考えているのに対し、大学生は自分やその他の家族・親族の果たす部分もあると考えていると言える。

表1.家事分担割合の平均(SD)

1. 食事のしたく

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
父の回答	0.40 (.80)	8.01 (1.96)	0.86 (1.32)	0.50 (1.18)	0.24 (.59)
母の回答	0.33 (.79)	8.18 (1.96)	0.60 (1.07)	0.47 (1.27)	0.42 (.74)
大学生	0.34 (.94)	7.31 (2.04)	1.07 (1.38)	0.68 (1.29)	0.61 (.94)
*分担者の主効果	F=1158.85 <sup>3)</sup> p=.000				
*分担者×回答者	F=2.89 p=.017				
多重比較	F=.176 p=.839	F=4.15 p=.017 母>学	F=2.65 p=.073	F=.65 p=.523	F=4.37 p=.014 父<学

2. 洗濯物をたたむ

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
父の回答	0.49 (1.67)	7.90 (2.20)	1.05 (1.30)	0.57 (1.32)	0.00 (.00)
母の回答	0.50 (1.72)	7.75 (2.86)	0.72 (.97)	1.00 (2.50)	0.04 (.26)
大学生	0.67 (1.89)	6.93 (2.54)	1.17 (1.20)	1.18 (1.94)	0.03 (.23)
*分担者の主効果	F=592.77 p=.000				
*分担者×回答者	F=2.21 p=.062				
多重比較	F=.26 p=.772	F=3.14 p=.045 父・母>大	F=3.01 p=.051	F=1.96 p=.144	F=.78 p=.459

3. 洗濯物をしまう

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
父の回答	0.62 (1.63)	7.76 (2.26)	1.03 (.99)	0.61 (1.10)	0.00 (.00)
母の回答	0.46 (1.48)	8.36 (2.76)	1.07 (1.46)	0.90 (1.98)	0.01 (.12)
大学生	0.76 (1.90)	6.13 (2.54)	1.79 (1.34)	1.28 (1.45)	0.03 (.23)
*分担者の主効果	F=584.74 p=.000				
*分担者×回答者	F=6.41 p=.000				
多重比較	F=.62 p=.540	F=9.49 p=.000 父・母>学	F=8.52 p=.000 父・母<学	F=3.64 p=.028 父<学	F=.60 p=.550

4. 居間の掃除

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
父の回答	0.97 (1.90)	8.21 (2.29)	0.37 (.85)	0.46 (1.18)	0.00 (.00)
母の回答	0.83 (2.04)	8.36 (2.61)	0.25 (.57)	0.57 (1.59)	0.00 (.00)
大学生	1.14 (2.23)	7.33 (2.71)	0.72 (1.10)	0.81 (1.61)	0.00 (.00)
*分担者の主効果	F=752.04 p=.000				
*分担者×回答者	F=2.37 p=.059				
多重比較	F=.420 p=.657	F=3.63 p=.028 母>学	F=6.08 p=.003 父・母<学	F=1.15 p=.320	-

5. トイレの掃除

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
父の回答	0.65 (1.92)	8.78 (2.48)	0.13 (.50)	0.45 (1.58)	0.00 (.00)
母の回答	0.47 (1.81)	9.21 (1.99)	0.08 (.36)	0.24 (.91)	0.00 (.00)
大学生	0.53 (1.80)	8.38 (2.66)	0.52 (1.45)	0.57 (1.74)	0.00 (.00)
*分担者の主効果	F=1093.69 p=.000				
*分担者×回答者	F=1.67 p=.160				

6. ゴミの分別

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
父の回答	1.21 (2.02)	7.75 (2.54)	0.46 (.74)	0.58 (1.48)	0.00 (.00)
母の回答	1.09 (2.19)	8.03 (2.49)	0.30 (.54)	0.58 (1.34)	0.00 (.00)
大学生	1.25 (1.65)	6.22 (2.78)	1.09 (1.16)	1.43 (1.89)	0.00 (.00)
*分担者の主効果	F=595.07 p=.000				
*分担者×回答者	F=7.50 p=.000				
多重比較	F=.13 p=.876	F=10.63 p=.000 父・母>学	F=18.17 p=.000 父・母<学	F=7.26 p=.001 父・母<学	-

7. 食料品・日用品の在庫管理

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
父の回答	0.59 (1.24)	8.80 (2.11)	0.16 (.49)	0.32 (1.12)	0.01 (.12)
母の回答	0.51 (1.23)	9.03 (1.84)	0.15 (.51)	0.30 (1.20)	0.01 (.12)
大学生	0.83 (1.41)	7.80 (2.43)	0.73 (1.44)	0.64 (1.64)	0.01 (.12)
*分担者の主効果	F=1389.26 p=.000				
*分担者×回答者	F=5.14 p=.001				
多重比較	F=1.21 p=.301	F=7.05 p=.001 父・母>学	F=9.85 p=.000 父・母<学	F=1.57 p=.211	F=0.00 p=1.000

8. 生活費を稼ぐ

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
父の回答	8.59 (1.77)	1.27 (1.62)	0.03 (.16)	0.12 (.73)	0.00 (.00)
母の回答	8.26 (2.30)	1.64 (2.29)	0.01 (.15)	0.09 (.43)	0.00 (.00)
大学生	8.07 (2.04)	1.66 (1.79)	0.03 (.16)	0.16 (.52)	0.00 (.00)
*分担者の主効果	F=1431.26 p=.000				
*分担者×回答者	F=1.09 p=.344				

9. 家計のやりくり

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
父の回答	1.32 (2.13)	8.48 (2.28)	0.01 (.12)	0.18 (.89)	0.00 (.00)
母の回答	1.26 (2.31)	8.50 (2.46)	0.05 (.36)	0.18 (1.00)	0.00 (.00)
大学生	0.95 (1.74)	8.71 (2.17)	0.04 (.34)	0.30 (1.36)	0.00 (.00)
*分担者の主効果	F=1143.73 p=.000				
*分担者×回答者	F=.43 p=.717				

10. 資産管理

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
父の回答	3.99 (3.64)	5.71 (3.70)	0.01 (.12)	0.29 (1.13)	0.00 (.00)
母の回答	3.73 (3.36)	5.88 (3.51)	0.00 (.00)	0.30 (1.35)	0.09 (.80)
大学生	4.24 (2.89)	5.32 (2.87)	0.01 (.12)	0.43 (1.15)	0.00 (.00)
*分担者の主効果	F=262.84 p=.000				
*分担者×回答者	F=.49 p=.651				

11. 家族のその日の予定を把握する

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
父の回答	1.88 (1.60)	7.07 (2.17)	0.61 (.85)	0.44 (.91)	0.01 (.12)
母の回答	0.97 (1.28)	8.05 (2.12)	0.55 (.96)	0.42 (1.10)	0.00 (.00)
大学生	1.50 (1.59)	5.86 (2.61)	1.61 (1.50)	1.03 (1.07)	0.00 (.00)
*分担者の主効果	F=739.50 p=.000				
*分担者×回答者	F=14.35 p=.000				
多重比較	F=6.98 p=.001 父>母・学	F=17.10 p=.000 母>父>学	F=20.50 p=.000 父・母<学	F=8.60 p=.000 父・母<学	F=.99 p=.372

12. 家族の会話に話題を提供する

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
父の回答	1.97 (1.00)	4.49 (1.76)	2.31 (1.36)	1.23 (1.34)	0.01 (.12)
母の回答	2.12 (1.55)	4.46 (2.20)	2.21 (1.52)	1.23 (1.27)	0.00 (.00)
大学生	1.76 (1.09)	2.88 (1.43)	3.18 (1.49)	2.15 (1.83)	0.05 (.36)
*分担者の主効果	F=201.75 p=.000				
*分担者×回答者	F=11.93 p=.000				
多重比較	F=1.61 p=.202	F=19.54 p=.000 父・母>学	F=10.17 p=.000 父・母<学	F=9.45 p=.000 父・母<学	F=1.18 p=.309

#### (4) 家事項目の分類

前項の分析で、家事の種類によって回答の傾向に違いがあることが示されたため、12項目をいくつかの領域に分類することを試みた。

回収された全ての回答(父・母・大学生あわせて1050人分)を込みにして、12項目それぞれの父の分担率に対して主成分分析を行った。「固有値が1以上」の条件で抽出された成分にバリマックス回転を加えた結果、表2の成分行列を得た。

第1成分は、炊事・洗濯・掃除などの一般的な家事にあたる項目への負荷が高いため、「家事」と命名した。第2成分は資産や家計といった家庭の経済管理に関する項目に負荷が高いため、「家計の管理」と命名した。第3成分は、話題提供や予定の把握など、家族メンバーの関係をとりもつ情緒的な機能に対して負荷が高かったため「情緒」と命名した。この3成分で全分散の55.96%が説明された。

成分行列は単純構造となっており、3成分の独立性は高いと考えられたので、各成分に負荷の高かった項目の素点の平均をもって、「家事」「家計の管理」「情緒」についての各人の分担率とした。ただし「生活費を稼ぐ」は、いずれの成分にも負荷が低かったためこの処理からは除外した。しかし内容的には重要と考えられるため、単項目のまま以下の分析に含めることにした。

4領域に分類した家事分担について、父母子それぞれの平均は表3に示す。

#### (5) 家族の属性による比較

(3)で父母と大学生の回答傾向には差があることが示されたが、以後の分析の便宜上、家事の4領域それぞれについて、分担者ごとに父・母・大学生の回答の平均を算出した。こうして1つにまとめた数値を、各家族の家事分担の様相についての総合的指標として分析に用いる。

表2.家事12項目の主成分分析(バリマックス回転)

		成分		
		1	2	3
家事	洗濯物をしまう	.829	.020	.035
	居間の掃除	.812	.052	.036
	洗濯物をたたむ	.787	.003	-.066
	ゴミの分別	.672	.031	.155
	トイレの掃除	.636	.017	.052
	食料品・日用品の在庫管理	.589	.382	.085
	食事のしたく	.503	.233	.196
家計	資産管理	-.010	.848	.104
	家計のやりくり	.236	.758	.093
情緒	家族の会話に話題を提供する	.131	-.032	.870
	家族のその日の予定を把握する	.213	.150	.729
	生活費を稼ぐ	-.161	.290	.395

表3.家事4領域の分担割合の比較

1.「家事」領域

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
父の回答	0.70 (1.19)	8.17 (1.71)	0.58 (.57)	0.50 (.93)	0.04 (.08)
母の回答	0.60 (1.24)	8.30 (1.83)	0.45 (.44)	0.58 (1.11)	0.07 (.13)
大学生	0.79 (1.26)	7.16 (1.87)	1.01 (.67)	0.94 (1.32)	0.10 (.14)
*分担者の主効果 F=1554.65 <sup>3)</sup> p=.000					
*分担者×回答者 F=6.50 p=.000					
多重比較	F=.44 p=.642	F=9.20 p=.000 父・母>学	F=20.23 p=.000 父・母<学	F=3.38 p=.036 父・母<学	F=4.52 p=.012 父<学

2.「家計の管理」領域

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
父の回答	2.65 (2.51)	7.10 (2.61)	0.01 (.11)	0.24 (.94)	0.00 (.00)
母の回答	2.50 (2.43)	7.19 (2.52)	0.03 (.18)	0.24 (1.00)	0.05 (.40)
大学生	2.59 (1.93)	7.01 (1.99)	0.03 (.18)	0.37 (.95)	0.00 (.00)
*分担者の主効果 F=703.72 p=.000					
*分担者×回答者 F=.13 p=.922					

3.「情緒」領域

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
父の回答	1.92 (1.09)	5.78 (1.64)	1.46 (.85)	0.84 (1.04)	0.01 (.11)
母の回答	1.52 (.98)	6.28 (1.63)	1.38 (1.01)	0.83 (1.06)	0.00 (.00)
大学生	1.63 (1.02)	4.33 (1.61)	2.41 (1.21)	1.61 (1.16)	0.03 (.18)
*分担者の主効果 F=642.28 p=.000					
*分担者×回答者 F=20.02 p=.000					
多重比較	F=3.07 p=.048	F=29.02 p=.000 父・母>学	F=22.78 p=.000 父・母<学	F=12.73 p=.000 父・母<学	F=.87 p=.422

4.生活費を稼ぐ

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
父の回答	8.59 (1.77)	1.27 (1.62)	0.03 (.16)	0.12 (.73)	0.00 (.00)
母の回答	8.26 (2.30)	1.64 (2.29)	0.01 (.11)	0.09 (.43)	0.00 (.00)
大学生	8.07 (2.04)	1.66 (1.79)	0.03 (.16)	0.16 (.52)	0.00 (.00)
*分担者の主効果 F=1431.26 p=.000					
*分担者×回答者 F=1.09 p=.344					

家族構成による比較

祖父母が同居しているかどうかの家族構成の違いによって、家事分担の様相に差があるかどうかを比較した(表4)。分担者(父/母/対象となった大学生の子ども/その他の親族/購入・外注)を被験者内要因として、家族構成(核家族/三世同居家族)を被験者間要因とした分散分析を行った。その結果、家事の4領域いずれにおいても、分担者と家族構成の交互作用で有意なものは見られなかった。

表4. 家族構成による家事分担割合の比較

1. 「家事」領域

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
核家族	0.81 (1.34)	7.97 (1.74)	0.68 (.46)	0.46 (.80)	0.07 (.10)
三世同居	0.49 (.82)	7.63 (1.57)	0.68 (.47)	1.14 (1.37)	0.06 (.07)
* 分担者の主効果 F=497.05 <sup>3)</sup> p=.000					
* 分担者×回答者 F=2.00 p=.148					

2. 「家計の管理」領域

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
核家族	2.60 (2.11)	7.24 (2.17)	0.03 (.12)	0.14 (.74)	0.00 (.00)
三世同居	2.47 (1.70)	6.86 (1.79)	0.01 (.07)	0.61 (.88)	0.05 (.24)
* 分担者の主効果 F=266.30 p=.000					
* 分担者×回答者 F=.71 p=.430					

3. 「情緒」領域

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
核家族	1.71 (.78)	5.45 (1.21)	1.88 (.81)	0.97 (.89)	0.02 (.09)
三世同居	1.67 (.82)	5.45 (.97)	1.50 (.59)	1.36 (.81)	0.07 (.03)
* 分担者の主効果 F=324.87 p=.000					
* 分担者×回答者 F=1.44 p=.236					

4. 生活費を稼ぐ

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
核家族	8.28 (1.84)	1.60 (1.75)	0.03 (.11)	0.05 (.19)	0.00 (.00)
三世同居	8.31 (1.57)	1.42 (1.59)	0.01 (.07)	0.26 (.68)	0.00 (.00)
* 分担者の主効果 F=539.33 p=.000					
* 分担者×回答者 F=.21 p=.671					

分担者のうち、祖父母は「その他の親族」に含まれる。三世同居家族では祖父母が少なくとも一人は同居しており、家事分担の一翼を担っているのではないかと予想されたが、全体的な傾向としては有意といえるほど大きな違いはないようである。それほどに、家事分担の主たる分担者（「家事」「家計の管理」「情緒」は母親、「生活費を稼ぐ」は父親）への集中が甚だしいということであろう。

母親の就労形態による比較

母親の就労形態によって、家事分担に差があるかどうかを比較した。分担者（父/母/対象となった大学生の子ども/その他の親族/購入・外注）を被験者内要因、母親の就労形態（フルタイム/パートタイム/無職）を被験者間要因とした分散分析を行った。結果は表5のとおりである。

交互作用が有意または有意傾向のあった領域について多重比較を行った。「家事」領域については、母親の分担率の差だけが有意であった。フルタイムで働く母は、パートタイムの母に比べて、有意に家事遂行の分担率が低い。しかし、フルタイム群で、母の分担率が低い分を代りに補う特定の人物はおらず、父やその他の親族が少しずつ多めに分担している程度である。つまり相対的な割合で回答を求めたために、母の分担率を少なく見積もる分を他の分担者に転化せざるを得なかったけれども、実態は誰が特に多いということもない、ということなのではないかと考えられる。

表5. 母親の就労形態による家事分担割合の比較

1. 「家事」領域

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
フルタイム	1.29 (1.33)	6.91 (1.97)	0.60 (.37)	1.12 (1.69)	0.08 (.12)
パート	0.54 (.79)	8.30 (.99)	0.63 (.35)	0.47 (.52)	0.07 (.10)
無職	0.69 (1.45)	8.15 (1.83)	0.67 (.45)	0.42 (.72)	0.06 (.08)
* 分担者の主効果 F=434.49 <sup>3)</sup> p=.000					
* 分担者×回答者 F=2.57 p=.053					
多重比較	F=1.56 p=.219	F=3.32 p=.044 フル<パート	F=.17 p=.847	F=2.53 p=.089	F=.35 p=.709

2. 「家計の管理」領域

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
フルタイム	2.59 (2.33)	6.95 (2.63)	0.00 (.00)	0.46 (1.43)	0.00 (.00)
パート	2.34 (1.94)	7.57 (1.89)	0.02 (.07)	0.08 (.23)	0.00 (.00)
無職	2.77 (2.13)	6.94 (2.15)	0.03 (.13)	0.26 (.72)	0.00 (.00)
* 分担者の主効果 F=207.34 p=.000					
* 分担者×回答者 F=.43 p=.693					

3. 「情緒」領域

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
フルタイム	2.15 (.63)	4.69 (1.25)	1.92 (.92)	1.21 (1.43)	0.00 (.00)
パート	1.33 (.68)	5.93 (1.21)	1.49 (.65)	1.25 (.55)	0.03 (.09)
無職	1.92 (.80)	5.26 (.96)	1.89 (.74)	0.96 (.77)	0.02 (.10)
* 分担者の主効果 F=260.01 p=.000					
* 分担者×回答者 F=3.33 p=.007					
多重比較	F=5.62 p=.006 フル>パート	F=4.83 p=.012 フル<パート	F=1.87 p=.164	F=.65 p=.529	F=.44 p=.646

4. 生活費を稼ぐ

	父	母	対象子	他親族	購入・外注
フルタイム	6.31 (1.79)	3.64 (1.73)	0.00 (.00)	0.05 (.18)	0.00 (.00)
パート	8.44 (1.42)	1.37 (1.07)	0.00 (.00)	0.08 (.16)	0.00 (.00)
無職	9.31 (1.00)	0.39 (.85)	0.06 (.16)	0.23 (.66)	0.00 (.00)
* 分担者の主効果 F=769.60 p=.000					
* 分担者×回答者 F=25.28 p=.000					
多重比較	F=21.58 p=.000 フル<パ・無	F=33.87 p=.000 フル>パ>無	F=2.49 p=.092	F=.958 p=.390	-

この結果は、伊藤ら(1984)の生活時間調査で、常勤の妻の育児・教育の分担率が無職やパートの妻と比べて低かったことを想起させる。常勤群のこの特徴は妻自身の育児・教育に従事する時間の少なさから生じるものであって、夫が育児・教育にかかる時間がわずかであることには妻の就労形態に

よる差はなかった。

「家計の管理」の領域では、交互作用は有意ではなかった。

「情緒」領域では有意な交互作用が見られた。妻がフルタイム勤務の群では、パートタイムの群に比べて、父の分担率が有意に高く、母の分担率は有意に低かった。つまり、パートタイム群では、家族への目配りや関係への配慮といった情緒的な機能は、母が主に単独で担っている。それに対してフルタイム群では、平等には程遠いものの、パート群よりは夫婦が協同して分担されていると言える。

「生活費を稼ぐ」の母の分担率は、当然のことながら、全ての群間に差が見られた。夫の分担率は、フルタイム群のみが低く、パート群と無職群に差はなかった。パート勤務の場合、妻の収入はそれなりに増えるものの、生活費のほとんどを夫が支えている状況を変えるほどの効果はない、ということであろう。

### (6) 「家事」分担の類型による比較

「家事」領域における5人(5種)の分担者の分担率に基づき、クラスター分析を行った。これは、「家事」分担のパターンをいくつかの類型に分類することを試みたものである。その結果、分析対象の76ケースは表6のような5つのクラスター(類型)に分類された。

第1クラスターは、母が最大の家事分担者ではあるが、その分担率は5~6割程度である。その他の親族の分担率の高さが特徴的なので「親族応援型」と命名した。第2クラスターは、母の分担率が最大ではあるものの、「ほとんど全て」というほどではない。残りの部分は母以外の人物が少しずつ分担している。従って「母中心型」と命名した。第3クラスターは、母がほとんどの家事を一人で担っている。従って「母単独型」と命名した。第4クラスターは、父と母の分担率がかなり接近しているため、「父母協同型」と命名した。第5クラスターは、父と大学生(女子)で家事のほとんど全てを担っている珍しいパターンである。1ケースのみであることから特殊例と考え、以下の分析からは除外することにした。

残りの4クラスターで、家族の社会的属性の特徴と、「家計の管理」「情緒」「生活費を稼ぐ」の3領域の分担率を比較したのが表7である。クラスターによって含まれるケース数のばらつきが大きいですが、平均値については一元配置の分散分析による差の検定を行った。度数については、度数5以下のセルが多いため、<sup>2</sup>検定による分布の差の検討は行わなかった。

父母の年齢や結婚年数には、4クラスターで有意な差は見られなかった。家族構成は、「親族応援型」で三世同居家族が多かった。家事分担に協力する「その他の親族」とは、やはり同居の祖父母が多いことをうかがわせる。

表6. 家事分担パターンの類型

	ケース数	「家事」の分担割合				
		父	母	対象子	他親族	購入・外注
第1クラスター 親族応援型	6	0.33(.24)	5.55(.58)	0.35(.23)	3.67(.73)	0.10(.09)
第2クラスター 母中心型	31	0.75(.81)	7.72(.63)	0.91(.50)	0.55(.53)	0.06(.07)
第3クラスター 母単独型	34	0.21(.20)	9.07(.38)	0.50(.24)	0.15(.17)	0.07(.11)
第4クラスター 父母協同型	4	3.27(.79)	4.37(.73)	0.60(.37)	1.71(.65)	0.04(.07)

表7. クラスターごとの家族の社会的属性の比較

		1.親族応援型 (N=6)	2.母中心型 (N=31)	3.母単独型 (N=34)	4.父母協同型 (N=4)	検定	多重比較
年齢	夫の年齢	52.00(2.19)	51.61(4.18)	50.29(2.60)	48.00(2.16)	F=2.08 p=.111	
	妻の年齢	47.67(2.80)	48.32(3.61)	47.97(3.95)	47.00(2.16)	F=.19 p=.901	
結婚年数	平均(SD)	21.17(1.47)	23.58(3.05)	23.15(3.30)	23.50(1.29)	F=1.07 p=.366	
家族構成	核家族	1 (16.7%)	21 (67.7%)	24 (70.6%)	3 (75.0%)		
	三世代同居	5 (83.3%)	9 (29.0%)	9 (26.5%)	1 (25.0%)		
夫婦の学歴 組み合わせ	父高校-母高校	0 (0.0%)	6 (19.4%)	6 (17.6%)	0 (0.0%)		
	父大学-母短大	2 (33.3%)	10 (32.3%)	9 (26.5%)	0 (0.0%)		
	父大学-母大学	1 (16.7%)	7 (22.6%)	4 (11.8%)	3 (75.0%)		
母の 就労形態 <sup>1)</sup>	フルタイム	2 (33.3%)	3 (9.7%)	5 (14.7%)	3 (75.0%)		
	パートタイム	0 (0.0%)	10 (32.3%)	10 (29.4%)	0 (0.0%)		
	無職	1 (16.7%)	11 (35.5%)	13 (38.2%)	0 (0.0%)		
母の ライフパターン	結婚後フルタイム継続	2 (33.3%)	1 (3.2%)	1 (2.9%)	3 (75.0%)		
	結婚後中断, 再就職	3 (50.0%)	15 (48.4%)	17 (50.0%)	0 (0.0%)		
	結婚後中断	1 (16.7%)	3 (9.7%)	9 (26.5%)	0 (0.0%)		
	結婚後無職	0 (0.0%)	8 (25.8%)	4 (11.8%)	0 (0.0%)		
父の仕事	家業・自営	1 (16.7%)	3 (9.7%)	5 (14.7%)	0 (0.0%)		
	専門職	0 (0.0%)	1 (3.2%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)		
	公務員・教員	2 (33.3%)	8 (25.8%)	6 (17.6%)	2 (50.0%)		
	民間の企業	3 (50.0%)	16 (51.6%)	19 (55.9%)	2 (50.0%)		
	自由業	0 (0.0%)	1 (3.2%)	1 (2.9%)	0 (0.0%)		
	その他	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (2.9%)	0 (0.0%)		
父労働時間	平均(SD)	48.83(20.73)	47.40(21.60)	56.85(22.67)	62.75(7.18)	F=1.37 p=.260	
「家計の管理」 の分担率	父	1.83(2.06)	2.47(1.65)	2.52(1.83)	3.21(2.69)	F=.47 p=.704	
	母	6.06(2.42)	7.45(1.64)	7.26(1.92)	6.38(2.70)	F=1.17 p=.326	
	対象子	0.00(.00)	0.02(.07)	0.03(.14)	0.00(.00)	F=.33 p=.801	
	他親族	2.11(1.65)	0.06(.16)	0.15(.55)	0.42(.83)	F=19.97 p=.000	1>234
	購入・外注	0.00(.00)	0.00(.00)	0.03(.20)	0.00(.00)	F=.39 p=.759	
「情緒」の 分担率	父	1.56(.66)	1.61(.74)	1.66(.79)	2.42(.74)	F=1.38 p=.256	
	母	4.25(1.39)	5.42(.81)	5.81(1.16)	4.71(.95)	F=4.67 p=.005	1<3
	対象子	1.42(.60)	1.78(.56)	1.78(.91)	1.67(.68)	F=.44 p=.729	
	他親族	2.72(1.13)	1.18(.60)	0.75(.68)	1.21(.80)	F=13.80 p=.000	1>3
	購入・外注	0.00(.00)	0.01(.06)	0.02(.09)	0.00(.00)	F=.20 p=.897	
「生活費を 稼ぐ」の分担 率	父	7.33(1.96)	8.47(1.62)	8.69(1.35)	4.75(.50)	F=9.29 p=.000	123>4
	母	2.00(2.04)	1.35(1.46)	1.20(1.36)	5.25(.50)	F=9.87 p=.000	123<4
	対象子	0.06(.14)	0.02(.12)	0.02(.08)	0.00(.00)	F=.29 p=.834	
	他親族	0.61(.80)	0.08(.21)	0.09(.46)	0.00(.00)	F=3.25 p=.027	1>4
	購入・外注	0.00(.00)	0.00(.00)	0.00(.00)	0.00(.00)	-	

夫婦の学歴組み合わせでは、「父母協同型」は夫婦とも高学歴のペアであることが特徴的である。

母の働き方を見ると、「父母協同型」の母はフルタイム就労、しかも結婚以来継続して働きつづけたケースである。「親族応援型」もフルタイム就労の2人は結婚以来働きつづけたケースであるが、その他の就労者（勤務形態が明確でないため、「母の就労形態」の集計には含まれていない）は、再就職（いわゆるM字型就労）であるようだ。つまり、同居の祖父母の協力を得て、結婚・出産後に再就職が可能となったケースと考えられる。一方、「母中心型」と「母単独型」では、母親は無職かパートタイマーが多い。職業を持っている場合も、ライフパターンとしてはM字型就労が多い。

父の仕事内容には、「母単独型」に家業・自営がやや多い他は、クラスターによる大きな特徴は見られない。いずれのクラスターでも約半数が民間企業勤務である。父の週あたり労働時間を見ると、最も父の家事分担率が高い「父母協力型」で労働時間が長いが、有意水準に達する差ではない。しかしこの結果から、父親が家事に参加しないのは「仕事が忙しいから」という理由はあたらないことが示唆される。

「家計の管理」「情緒」について、「親族応援型」でその他の親族の分担率が他の類型に比べて高かったのはうなずける。日常の買い物ややりくり、家族の予定把握等、いわゆる「主婦役割」を同居の親に安心して任せて、母親は家庭外で後顧の憂いなく働くことができるのだろう。

「生活費を稼ぐ」については、興味深い結果が示された。「夫婦協同型」では、父親より母親のほうが生活費の分担率が多い。やはり女性の経済力が男性のライフスタイルの転換を促す最大の要因となるようである。

## 全体的考察

本稿では、夫婦以外の家族メンバーや家事サービス業の利用まで含めた家庭内の家事分担の様相と家族の社会的属性との関連を検討した。

これまでに報告された数々の調査と同様、今回の調査でも、全体的傾向としては生活費の稼得以外の家事はそのほとんどを母親が担っていることが示された。家事サービス業は母親が就労している場合であっても積極的に利用されない。

一方で家事分担パターンの類型のひとつ「親族応援型」では、家事の4領域すべてで「その他の親族」の分担率が高いことが示された。この類型に含まれるケースは6ケースだけであるが、そのうち5ケース（83.3%）が祖父母と同居しており、何らかの形で現在就業中の母親も5ケース（83.3%）である。つまり女性は、夫が家事・主婦役割に参加せず、あてにできる人的資源が手近にある場合、自分は就労して主婦役割を「順送り」にすることがある、と言えるのではないかと。自分がしない家事を購入・外注はしないけれども、家庭内の人間に頼むことに抵抗は持たない背景にあるのは経済的理由なのか、心理的な理由なのかは、本稿では割愛した他の調査項目を分析に加えることである程度検討が可能であろう。

柏木（1999）のモデルでは、社会変動としての家事の省力化は、主婦役割の縮小と男性の家事参加を促し、男女が伝統的性役割から自由になって家族が個人化すると予測されている。主婦役割の順送

りは「誰かが働き、誰かが家を守る」という意味で、従来の性別分業の応用であり、このモデルが示すような個人および家族の質的变化とは異なる。今後、意識や価値観の分析や家事サービスの利用に積極的なケースの検討を行うことで、マクロな社会変動が家族・個人の生活を変容させる過程を詳細に検証したい。

家事分担についての調査を行う場合、「客観的な事実としての家事分担をどのように捉えるか」という測定方法が問題になる。本研究においてもその問題は解決しておらず、便宜的に父・母・大学生の子ども3者の回答を平均する形をとっている。

しかし3者の回答を素データとして見ると、共同生活を営んでいても家事分担への認識が一致するとは限らない。特に大学生の子どもの家事分担は、本人の認識に比べて父母からは軽視されるという傾向が見られた。父母にしてみれば、自分達の結婚によって「創った」家庭であり、運営の責任は自分たち二人にあると感じるのは自然ではある。しかし、子どもが大学生になれば、家族の一員として両親と対等に参与することができる面もあるのではないか。子どもへの家事分担期待の低さは「家族・親子とはどうあるべきか?」「家族メンバーの関係はどうあるべきか?」という認識が世代間・家族メンバー間でずれていることを示唆するものであり、家族観や家庭生活への満足度と併せて、改めて検討すべき問題であろう。

最後に、家事分担パターンについての類型を設定し、社会的属性の比較を行った。クラスターによってケース数のばらつきが大きいため考察には慎重を要するが、母親の就業とライフパターンとの関係が深いことがうかがわれた。ここから柏木(1999)のモデルのとおり、社会変動を受けて、女性の生活・心理に起きた変化が家族のあり方を変えていくことが示唆される。

しかし、モデルのもう一方に示されている男性についてはどうであろうか。家事分担パターンによる比較では、父親の仕事内容、労働時間に顕著な差は見られなかった。つまり、男性が家事に参加するかどうかは男性本人の仕事の状況とはあまり関連しないということが明らかになった。

本来、妻が家庭外で就労するか否かによって家庭のライフスタイルが何らかの影響を受けることは必至である。夫の側がその影響を受け止めて自分のライフスタイルも変容させていくのか、妻の就労による変化を「なかったこと」として「働くなら家庭に支障のない範囲で」と妻一人の努力を求めるのかの違いには、現在のところ、妻の経済力が大きく関与している。「夫婦協同型」に示されたように、妻の収入が夫と同等かそれ以上になってはじめて夫の行動に変化が現れる。これは、平等主義的家族の出現には、夫の就業と同程度の重要性を持つ妻の「職業役割」の創出が必要だとする松信(1995)の知見とも一致する。妻の経済力=夫の男性役割の危機という外圧なしに、男性のライフスタイルが変わることはそれだけ難しいのだと考えられる。この頑なな男性のライフスタイルや心理が、経済力を持たない妻との関係を築く上ではマイナスに作用することは想像に難くない。今後さらに、結婚の満足度、個人化尺度、家族観等との関連を検討していくことで、最適性を失ったといわれる性別分業的な夫婦・家族の行方について考えて見たい。

- 1) この調査全体の企画・実施・分析は、筆者らの他、研究協力者である平山順子、加藤千恵子、田矢幸江（いずれも白百合女子大学）によって進められている。
- 2) 3者の回答の一致度を見るには相関係数を利用する方法も考えられる。全体を10とした相対数字で回答を求めたことから、相関係数の解釈が複雑になるため本文では割愛した。項目、分担者にもよるが、各項目5人（5種）の分担者の少なくともどれか1つでは.20代の後半～.90代までの有意な相関が得られている。
- 3) 被験者内要因（分担者）の主効果及び交互作用のF値はGreenhouse-Geisserのイプシロンを用いて修正したものである。以下の全ての表で同様である。なお、被験者内要因はいずれの表・項目でも有意であるが、石村（1997）によると「被験者内因子のように対応関係がある場合、興味の対象はその変化のパターンにある。したがって...（中略）すべての組合せに対する多重比較をしてもあまり意味がないと考えられている」という。従ってここでは分担者についての多重比較は行わなかった。
- 4) 家業・自営や自由業、その他の職業など、勤務形態の明確でないケースはいずれにも含まれないため、各セルの合計とクラスターのケース数は一致しない。

## 引用文献

- 石村貞夫. (1997). *SPSSによる分散分析と多重比較の手順*. 東京：東京図書.
- 伊藤セツ・天野寛子・森ます美・大竹美登利. (1984). *生活時間*. 東京：光生館.
- 岩間暁子. (1997). 性別役割分業と女性の家事分担不公平感. *家族社会学研究*, **9**, 67-76.
- 柏木恵子. (1999). 社会変動と家族の変容・発達. 東洋・柏木恵子(編), *社会と家族の心理学* (pp.9-15). 京都：ミネルヴァ書房.
- 松信ひろみ. (1995). 二人キャリア夫婦における役割関係：平等主義的家族への可能性. *家族社会学研究*, **7**, 47-56.
- 目黒依子. (1987). *個人化する家族*. 東京：勁草書房.
- 諸井克英. (1996). 家庭内労働の分担における衡平性の知覚. *家族心理学研究*, **10**, 15-30.
- 内閣府. (2001). *男女共同参画白書（平成13年度版）*. 東京：財務省印刷局.
- NHK放送文化研究所(編). (2002). *日本人の生活時間2000*. 東京：NHK出版.
- Nakagawa[Kazui], M., Teti, D. M., & Lamb, M. E. (1992). An ecological study of child-mother attachments among Japanese sojourners in the United States. *Developmental Psychology*, **28**, 584-592.
- 落合恵美子. (1997). *21世紀家族へ〔新版〕*. 東京：ゆうひかく選書.
- 岡村清子. (1997). 主婦の就労と性別役割分業. 野々山久也・袖井孝子・篠崎正美(編著), *いま家族に何が起きているのか* (pp.91-117). 京都：ミネルヴァ書房.
- 斎藤茂男. (1982). *妻たちの思秋期*. 東京：共同通信社.
- 総理府広報室. (1972). 婦人に関する意識調査. (厚生省. (1998). *平成10年版厚生白書*. 東京：ぎょ

うせい. より引用)

総理府広報室. (1997). 男女共同参画社会に関する世論調査. (厚生省. (1998). 平成10年度版厚生白書. 東京:ぎょうせい. より引用)